



国立科学博物館に寄贈
世紀を超えた鳥類の標本



令和6年10月
諏訪湖クラブ

長野県/地域発 元気づくり支援金事業

ごあいさつ

当諏訪湖クラブの会員であり、日本野鳥の会の会員でもある林正敏さんは、明治末期から大正期を中心に集められた鳥の標本を大量に保管してきました。林さんはこれらの標本を後世に残し、有効に利用することができないかと常日頃考え、周りの人とも相談をしてきました。その結果、国立科学博物館との協議がまとまり、このほど全資料を同博物館に寄贈することになりました。林さんのご自宅に保存されていた全資料はこの11月に科博に搬送されることになりました。

貴重な資料の保存先が決まったことは嬉しいことですが、一度博物館に収容された資料は一般の人には自由に見ることはできません。林さんは、標本を収集し、保存してきた地元の方々の業績を地元の人たちにも公開し、地元の先人が残した偉業を直に目にする機会を提供することとしました。

そこで企画されたのが今回の公開展示会です。展示会は令和6年6月8日から一ヵ月間にわたって原村の八ヶ岳美術館で行われました。当初は地元を中心とした公開展示を目指しての企画でしたが、結果は、地元はもちろんのこと、全国からの来館者を含め、2千人を超える方々に標本を見ていただくことができました。

科博に寄贈する標本は、鳥類が2400点、鳥卵が550点、小型獣類が60点で、そのほか博物史料としても貴重な「信濃稀産鳥類」の掛け軸や、大正時代に作られた石版画による「狩猟鳥類掛図」(5枚組)など、標本に由来した関連品も幾つかありました。また、鳥の標本は、私たちが目にする生きた姿の再現ではなく、研究用に作られた、寝かした姿の仮剥製と呼ばれる標本です。

林さんが保管していた標本の提供元は、旧島内村(現松本市)の漢方医、高山鼎二さん親子が採集し、製作したものと、もう一方は旧上諏訪町(現諏訪市)で町長を務められた金井汲治さん親子が蒐集した標本です。この標本は長い間諏訪教育博物館で保管されていましたが、標本類に関心がある林さんに譲られたものです。

今回の国立科学博物館への寄贈は、林さんが、将来にわたって標本を有効に活かせる施設はないか探していたときに、信州大学の笠原里恵さんから、科博に寄贈されてはどうかと勧められたことがきっかけだったとお聞きしています。科博への寄贈について、林さんは「いずれの鳥も今では入手が困難なものばかり。遺伝子解析が飛躍的に進む時代を迎えた今、標本の果たす学術的な役割は大きいだけに、国内でもっとも信頼できる施設に決まり、ようやく念願が果たせました」と話しています。

動植物に限りませんが、これらの標本は地球が残した未来への自然環境の記録遺産でもあります。この冊子をご覧くださいながら少しでも動植物標本類の保存に興味をもっていただけたら幸いです。最後になりましたが、本事業の開催に当たって快く展示場を提供くださった原村の「八ヶ岳美術館」の館長を始めとして職員の方々には多大なご支援をいただきました。また、本冊子の製作にあたっては長野県の「地域発 元気づくり支援金」の交付を得ました。終始この事業を暖かく見守ってくださった多くの方々を含めて、そのご支援に深く感謝申し上げます。

諏訪湖クラブ会長 沖野 外輝夫

国立科学博物館へ一括寄贈 林正敏氏鳥類資料緊急展示

世紀を超えた 鳥類標本の全容

八ヶ岳美術館
原村歴史民俗資料館

〒391-0115 長野県諏訪郡原村17217-1611
TEL/FAX: 0266-74-2701
E-mail: info@yatsubi.com
https://yatsubi.com

協力：日本野鳥の会諏訪支部



松平頼孝お抱えの鳥類画家 小林重三(1887-1975)〈信濃稀産鳥類の軸画〉
(旧高山家蔵/林正敏コレクション)

Great Bird Collection Over 100 Years,
by 4 Collectors

Special exhibition

2024年
6/8 [日] - 7/7 [日]
会期中無休

開館時間 9:00 ~ 17:00
(最終入館 16:30)

入館料 一般 / 高校生以上
510 円 (460 円)
小中学生
250 円 (200 円)

()内は20名以上の団体料金
諏訪6市町村の小中学生無料

主催：八ヶ岳美術館、原村
原村教育委員会

協賛：スワテック建設株式会社
諏訪信用金庫
株式会社イツミ
たてしな自由農園

〈ライチョウ〉標本(旧高山家蔵/林正敏コレクション)



〈カワセミ〉標本(旧金井家蔵/林正敏コレクション)

金井汲治 (1858-1939)
Kyuji KANAI
金井清 (1884-1966)
Kiyoshi KANAI
高山忠四朗 (1864-1928)
Teiji TAKAYAMA
高山忠四朗 (1901-1993)
Chushiro TAKAYAMA

八ヶ岳美術館提供

国立科学博物館へ一括寄贈 林正敏氏鳥類資料緊急展示

世紀を超えた 鳥類標本の全容

2024年 6/8 日
7/7 日
会期中無休

Great Bird Collection Over 100 Years, by 4 Collectors Special exhibition

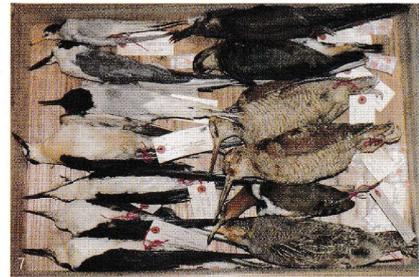
八ヶ岳美術館にて、林正敏氏所蔵の鳥類学黎明期の貴重な鳥類学資料による1ヵ月間の緊急展示を開催いたします。

明治末期から大正期、鳥類学の黎明期に信濃一帯で研究用としての鳥類捕獲に従事した金井汲治(1858-1939)・金井清(1884-1966)父子、高山鼎二(1864-1928)・高山忠四朗(1901-93)父子の4人が収集した二千点を超える学術標本の価値が認められ、このたび国立科学博物館への一括寄贈が決定しました。

国内屈指の鳥類コレクションが信州の採取家たちによって形成され、この諏訪に引き継がれていました。狩猟規制が緩和大量捕獲が許されていた明治・大正期のみ採集でき、現在では希少な鳥たちが中核となる重要な鳥類資料をこのたび公開いたします。研究のために捕獲された野鳥には、ライチョウ9点をはじめオオワシ、メグロ、アカヒゲ、カラスバトなど国天然記念物や絶滅危惧種となった鳥も、数多く含まれています。

各種の鳥卵標本とその製作具、石版画による大正期の狩猟鳥類掛図、げっ歯類の皮革標本など、学術の発展に寄与した貴重な資料をあわせて公開いたします。

ぜひこの機会にご覧ください。



Event

- 講演会「剥製とその遺伝子解析が教えてくれること」
講師：笠原里恵（信州大学理学部 湖沼高地教育研究センター 諏訪臨湖実験所 助教/鳥類学）
日時：6月22日（土）13:30～15:00
- はらむら塾講演「鳥学を支えた採集者たち・世紀を超えた鳥類標本を語る」
講師：林正敏（日本野鳥の会諏訪支部 名誉支部長）
日時：7月4日（木）13:30～15:00

※各回とも参加費：無料/入館料別途（要予約） 会場：八ヶ岳美術館 企画展示室

Workshop

- 子どもクラフト教室 鳥の羽でつくるドリームキャッチャー
日時：6月9日（日）10:30～12:00

※参加費：無料/入館料別途 定員：5名（要予約）会場：八ヶ岳美術館 企画展示室

- 1《コウライウグイス》標本 2《ベニサンショウクイ》標本 3《オオワシ》標本
- 4 農商務省農務局『狩猟鳥類掛図』日本鳥類学会発行/明治時代 5《鳥類標本製作道具一式》
- 6《モズ類》標本 7《アジサシ他 水鳥》標本 8 漢方医 高山鼎二の薬箱に納められた卵の標本
- 1,2,3,6,7 金井家旧蔵 4,5,8 高山家旧蔵/林正敏コレクションより

八ヶ岳美術館 原村歴史民俗資料館

〒391-0115 長野県諏訪郡原村17217-1611 TEL/FAX 0266-74-2701
E-mail: info@yatsubi.com URL: https://yatsubi.com

ご利用案内

開館時間 | 9:00～17:00(最終入館は16:30まで)

休館日 | 年末年始、臨時休館を除き年中無休

入館料 | 一般(高校生以上):510円(460円)、小中学生:250円(200円)

※ ()内は20名以上の団体料金

諏訪6市町村の小中学生は図書館利用カード、学生証などの提示により 無料で入館できます



八ヶ岳美術館の建物は、文化勲章受章者・村野藤吾の設計によるもので、日本建築家協会25年賞を受賞しました。曲線を多用したドーム型で天井はレースカーテンの絞り吊りになっています。落ち着いたやわらかな明かりのなかで、作品をゆったりとご覧いただけます

■常設展

美術作品：清水多嘉示(彫刻・絵画)、津金雀仙(書)

考古学資料：国史跡阿久遺跡をはじめ、村内の遺跡から出土した縄文土器・石器を展示



<交通案内>

■中央自動車道
諏訪南インターから7km
小淵沢インターから14km

■電車/バス(茅野駅/富士見駅から)
バスの運行は季節や曜日によって変動します。詳しくはお問い合わせ下さい。

八ヶ岳美術館提供

■ 鳥の剥製とその活用

鳥の剥製は用途によって本剥製と仮剥製の二通りで作られます。その違いと活用についてみましょう。

本剥製

博物館などで展示されている一般者用に作られた剥製は本剥製と呼ばれるものです。その鳥の生態に理解が深められるよう生きた姿で再現されています。羽毛の美しさ、迫力ある姿や精悍さ、愛らしさなど、それぞれの種がもつ容態が見る人に伝わるよう製作されています。

標本は一部の骨だけを体内に残し、^{きんにく}筋肉や内臓などはすべて取り外した後、針金を芯に綿や木毛^{もくもう}などで整形し義眼を入れて作られます。^{ごちよう}誇張した飾り姿でなく、博物資料として質の高い本剥製にするには、高度な技術が求められ、国際的なコンクールも開かれます。



オシドリの本剥製

仮剥製

仮剥製は本剥製とは違って調査や研究に用いるために作られた特別な標本です。^{とうこつ}頭骨など一部の骨だけを残し内部を取り除いたあとに細い棒などに綿、木毛などを使って寝かせた体型にし、^{ぎがん}義眼は入れません。そのため調査研究する際に体長や翼長など、統一した測定ができるのです、もし本剥製のように様々な姿をしていたなら同じ種類であっても正確な測定はできません。世界中のほぼすべての^{はくぶつかん}博物館が所有する仮剥製は統一した姿で保存されています。コンパクトな体型で作られているため、引き出しでの収蔵が可能となり 100 年、200 年と、世代を超えて研究に生かせるのです。

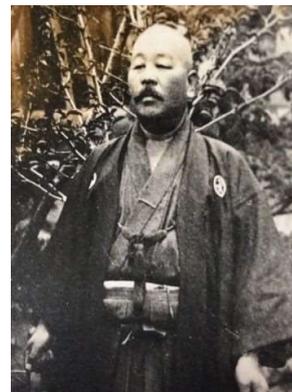


オシドリの仮剥製

■ 標本を未来に残した信濃の4氏

高山 鼎二 (1864-1928) 島内村 (現松本市) 出身

高山鼎二は漢方医^{かんぼうい}を生業として信州の野山で薬草を採取しては生薬を製造し、処方するなどしていましたが、郷土の博物学者、河野齡蔵や矢沢米三郎らと親しく付き合った影響から、後に鳥を採集し標本にして学校や博物館に納める高山博物標本製作所^{おこ}を興しました。かたわら鼎二は農商務省の鳥獣調査員として、研究用の資料集めも行ないました。活動の一例には食性調査に協力するため北アルプスでライチョウ^{ほかく}を捕獲して、餌が入った消化器官をホルマリン液に浸し研究機関に送りました。調査員は一年を通して狩猟が可能だったため、四季のライチョウが捕獲でき、通年の食性が徐々に明らかになりました。このほか来日したイギリス人で博物商のアラン・オーストンとも親しくなり、オーストンから譲られた鳥卵の標本を作る道具を使い多くの標本を作り残しました。



高山 鼎二

高山博物標本製作所で作られた鳥の標本類は、保存性に優れた効果をもつ劇薬物の亜ヒ酸を用いて作られています。現在でも長野県内の公共施設ほか、県外では岐阜県博物館にも高山の標本が保存されています。

高山 忠四郎 (1901-1993) 東筑摩郡 (現塩尻市) 出身

高山忠四郎は鼎二の養嗣^{ようし}として迎えられ、後に高山理化精機(株)を創業し社長を務めました。一方、鳥の捕獲や標本作りは義父、鼎二の影響が大きかったといえます。活動を通して鳥類学者の内田清之助や清棲幸保はじめ多くの研究者と親交があり、鳥の調査や捕獲作業にも協力しました。自身による鳥の捕獲は主に南北安曇での活動が中心で、冷凍保存が困難だった当時は、捕えた鳥を素早く標本作りに回したそうです。

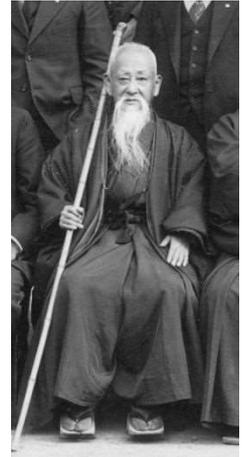
生涯を通した高山の活動は山岳活動で、青年時代に山の詩人、百瀬慎太郎に影響され、戦後まもなく日本山岳会信濃支部を結成し、信州に疎開していた著名な登山家の榎有恒、山岳詩人の尾崎喜八に支部を率いてもらい、続く3代目の支部長として12年。そのほか長野県山岳協会の初代会長、日本山岳会顧問、国立公園指導員、長野県自然環境保全審議会委員など、山岳や自然にかかわる多くの役職を続けました。毎年6月に上高地で開催されるウェストン祭^{そそ}の運営にも情熱を注ぎました。



高山 忠四郎

金井 汲治 (1858-1939) 上諏訪町 (現諏訪市) 出身

安政 5 年、高島藩の藩士に生れた金井は長野師範学校を卒業後、高島小学校の校長を経て長野県議会議員や上諏訪町長などを務めました。博物学に関心が深かった汲治は諏訪湖の鳥類の研究も行い、明治 20 年から 18 年間の観察で、海鳥など 13 科 60 種を観察。この記録は当時の理学博士、飯島 魁 (日本鳥学会初代会長) の指導によって諏訪湖鳥類目録が作成されました。その後、このリストは著名な湖沼学者、田中阿歌麿著「湖上より見たる諏訪湖の研究」の[鳥類]にも引用されています。汲治が鳥の標本を入手した手段は明らかではありませんが、明治 26 年には冬鳥として諏訪湖に飛来したオオワシを上諏訪町湯の脇で採集し標本化され、この資料は今も保存されています。



金井 汲治

汲治はまたチョウの研究者でも知られ、明治 25 年に「動物学雑誌」に「諏訪郡ノ蝶類及明治二十四年ニ於ケル季節表解説」(国立国会図書館蔵)を發表し、この時代に一地方での完全な目録ができたことが高く評価されました。



クビワカラスを手にした
金井 汲治と残されていた
その標本 (左)

金井 清 (1884-1966) 上諏訪町 (現諏訪市) 出身

汲治の長男として生れ第一高等学校 (現東京大学) に学び鉄道院に入省し鉄道院参事、のちに戦後初の諏訪市長 (通算で 2 期) を務めました。

清が求めた鳥類標本は、すべて父汲治の研究に協力したものと考えられます。保存されている金井標本の中には、中国北京で入手したハゲワシやノガンなど大型鳥類はじめ、数々の外国産鳥類が含まれています。国際会議など海外に出る機会の多かった清が、滞在先で入手し汲治に送ったとみられます。

博物史にかかわる清の最大のエピソードは、明治 38 年にイギリス大英博物館で働くアメリカ人の動物学者、マルコム・アンダーソンが博物資料を求めて来日したとき、英語が堪能だった清が通訳をかって出て各地に随行。途中、奈良県東吉野村の鷲家口に立ち寄ったとき、地元の猟師がオオカミを仕留めて持ち帰ったところに遭遇。持ち金が少なくなっていたアンダーソンは清に値切らせるよう伝え、交渉の末に 8 円 50 銭で入手。この皮と骨格をイギリスに持ち帰りました。以後、ニホンオオカミの記録はなく絶滅。清は国内最後の 1 頭に立ち会った人となりました。この記録は「満州生物学会会報」第 2 巻、第 2 号に清が記しています。



金井 清

■ 原村・八ヶ岳美術館の展示会場の記録

八ヶ岳のすそ野に広がる森に囲まれた八ヶ岳美術館。自然環境に恵まれ、多くの野鳥が飛び交うなか公開展示が行われました。



一世紀を過ぎた鳥の標本や博物画が展示された会場



一点ずつ確認しながら熱心に標本を見る参加者



薬品を使わず安全に触れられるコーナーは大人気



遠方からやって来た鳥を研究する学生たち



標本箱にあった真珠湾攻撃の翌日の新聞を見る参加者



クマゲラ (右端)、など各種キツツキ



モズ (左端)、巨大なオオカラモズ (右端)
など各種モズ



美しいオオルリ (下)、コサメビタキなど



ウソ (右)、メボソムシクイなど亜高山帯の鳥



ヤマガラ(上)、コガラ(右下)、ゴジュウカラ



シメ (下) と従来の冬鳥ジョウビタキ



手前オオシゴイやミサゴなど水辺の鳥



天然記念物のカラスバトやメグロなど珍鳥



ハゲワシ、オオワシ、イヌワシなど猛禽類



巨大なノガン、オオハクチョウなど



サケイ、ヤマウズラなど外国の鳥



ヤマネ、モモンガ、ネズミ類などの小型哺乳類

■ 鳥卵と標本の作り方

鳥の卵は、鳥の大きさによりサイズが違い、種類により色彩や表面の模様が違い、特殊な営巣環境によっては形状に違いが見られます。人里にいる地味な色彩のムクドリが美しいブルーの卵を、山で鳴くウグイスが暗赤色の卵を産むなど外観にも意外性が見られます。

右の卵の標本は、高山標本の中に含まれていたもので、47種 550点余があります。卵の標本について、高山忠四朗は「特殊な錐きりを使って穴を開け、ガラス管で中身を吹き出しては製作した」と語っていました。



古い薬箱に入っている各種の卵標本

明治4年（1871）、イギリス人で博物資料の収集家、アラン・オーストンが来日。のちに横浜で貿易商のオーストン社を立ち上げました。高山鼎二とは標本をとおして知り合い、鳥獣の標本を高山に求める一方、オーストンからは卵の標本を作る専用器具（左下）が高山に譲られました。



アラン・オーストンから譲られた
卵標本の製作器具



100年たっても色彩や模様が
明瞭な卵

■ 一博物画の巨匠一 寄贈する小林重三の作品から

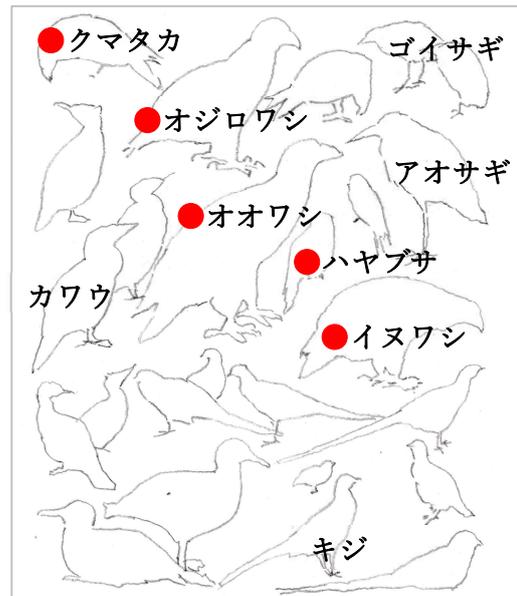
小林 重三（しげかず）（1887—1975）

小林画伯は、明治から昭和初期の生物画家で、鳥の生態画を描き続け、日本の鳥類三大図鑑といわれる黒田長禮の『鳥類原色大図説』、山階芳麿の『日本の鳥類と其生態』、清棲幸保の『日本鳥類大図鑑』はじめ、文献、科学雑誌など多数に掲載されました。

○狩猟鳥類掛図



狩猟鳥類掛図 其の一



名前を明記した鳥は諏訪湖周辺で見られる鳥で●は絶滅危惧種です

松平 頼孝(よりなり)（1876～1945）

徳川系譜の子爵^{ししやく}で鳥類学者。東京小石川の松平鳥類標本館には国内外に生息する1万点の鳥の標本がありました。お抱えの生態画家・小林重三により描かれた膨大の鳥画は、鳥類学の黎明期^{れいめいき}に多くの学者の書物に使われました。表紙の軸画は大正初期に、松平の依頼をうけた高山鼎二が自分で捕獲し仮剥製にした2000点の標本を送ったところ、中に極めて稀な9種類の鳥が入っていました。松平はこれを喜び小林に命じて軸画を描かせ、高山にその掛け軸を返礼しました。小林初期のころの貴重な作とされています。大正4年、松平は日本鳥学会が発刊した「鳥」第二号に、9種類の標本に含まれていた日本初のハマヒバリ、マキノセンニュウ、ツメナガホオジロについて「信濃ニ於テ捕獲セル稀ナル三種ノ鳥類ニ就テ」の論文を載せました。

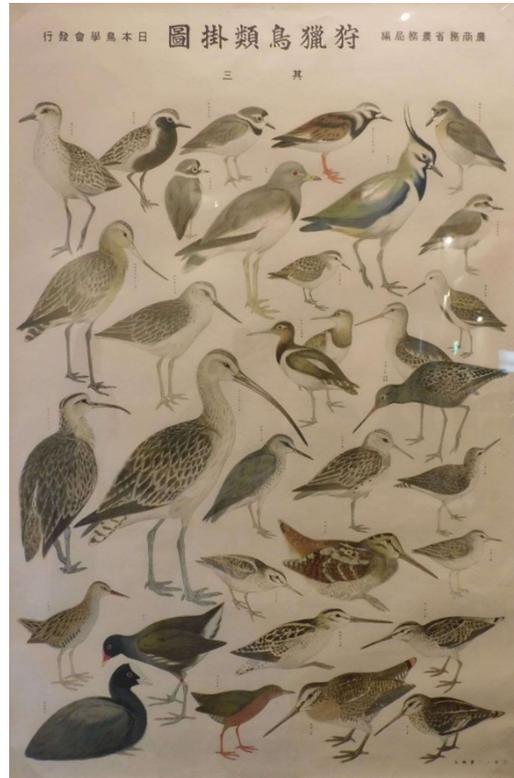


松平 頼孝

5枚組の掛図は、大正13年（1924）に農商務省と日本鳥学会が共同制作したもので、小林の絵図を石版刷りにして作られました。制作されてから今年で100年が経過。当時は狩猟の対象だった鳥たちが、今日では絶滅の危機に直面する種類も多く、時の変化に驚かされます。



狩猟鳥類掛図 其の二



狩猟鳥類掛図 其の三



狩猟鳥類掛図 其の四



狩猟鳥類掛図 其の五

国立科学博物館に寄贈 鳥類の学術資料

林正敏さん所蔵コレクション

高山標本

鳥類の標本 1722点、鳥卵550点、小型獣の皮革標本59点、卵の標本製作具一式、ほか軸画や掛図など多岐にわたる。鳥の捕獲は北アルプス一帯をはじめ、安曇地方を主に採集し、標本は自らの手で作られている



たかやま 徳二 高山 徳二

1864~1928年

松本市、漢方医の傍ら、農商務省の鳥獣調査員として鳥獣の捕獲を行う。後に高山博物館製作所を興し、鳥の標本を博物館や学校などへ納品。一部は横濱の博物館、オーストン社を介して海外へも送られた



高山を代表する鳥ライチヨウの標本。写真の資料は既に組織の一部を取って遺伝子解析など研究に寄与している



たかやま 忠四朗 高山 忠四朗

1901~1993年

鼎二の子息、高山理化精機株式会社の子息。農商務省鳥獣調査員として鳥獣の食性調査に協力した。登山家で1947(昭和22)年に日本山岳会信濃支部を結成し、支部長、長野県山岳協会初代会長、日本山岳会理事を務めた

まつだいら 頼孝 松平 頼孝

1876~1945年

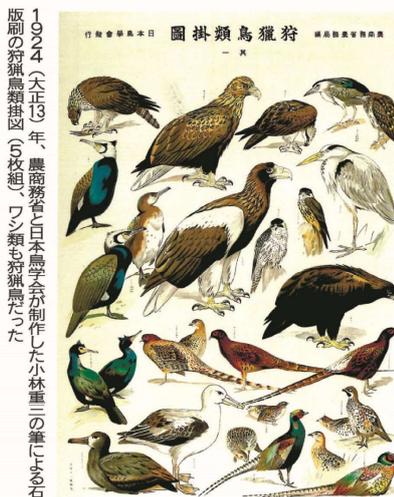
徳川系譜の子爵で鳥類学者。東京小石川の松平鳥類標本館には国内外に生息する1万点の鳥の標本があった。お抱えの生鷹画家・小林重三により描かれた膨大な鳥画は、鳥類学の黎明(れいめい)期に多くの学者の書物に使われた



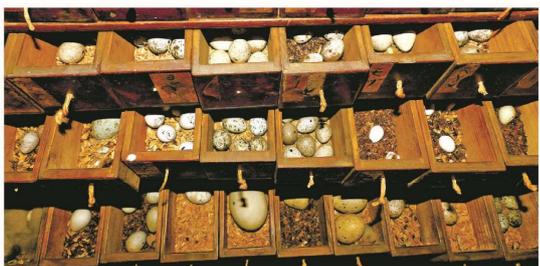
オオルリ、イスカ、ノゴマ、ウソなど日本の山野に生息する小型の野鳥たち



大正期、高山家から松平頼孝に2000点の標本が送られた。その中に国内で希少な9種類があり、これに感激した頼孝は小林に描かせ軸画にして高山に返礼した極めて貴重な資料



1924(大正13)年、農商務省(日本鳥学会が制作した小林重三の筆による右)版刷の狩猟鳥類掛図(5枚組)、ワシ類も狩猟鳥だった



高山親子が製作した鳥卵の標本。日本で最小部類のミソサザイをはじめ、ヨタカなどの卵550点が残されている。右の写真は鼎二がイギリス人の博物商、アラン・オーストンからもらった鳥卵標本の製作具



市民新聞掲載記事

3000点

金井標本

鳥類の標本は669点。上諏訪湯の脇で採集したオオワシや上諏訪四賀で採集した数羽のサンコウチョウは興味深い。またハゲワシ、ナベコウ、ノガンなど大型鳥類は清が官僚時代に海外への派遣先で入手した資料とみられる



金井 汲

1858~1939年

上諏訪町出身、高島小学校の校長などを経て上諏訪町長を務めた。高山蝶の研究として知られ、動物学雑誌に研究成果を載せ高く評価された。また諏訪湖を中心とした水鳥を調べたほか、国内外の鳥の標本を蒐集した写真は諏訪市博物館提供



金井 清

1884~1966年

汲治の長男で戦後初の諏訪町長を連任する期を務めた。父の標本蒐集に協力して、主に外国産の鳥の標本を入手した。1905(明治38年、第一高(現東大))に在学中、博物資料を求めて来日したロンドン自然史博物館の米国人マルコム・アンダーソンの通訳者として随行。奈良県東吉野村へ行ったとき、猟師がニホンオオカミを仕留めてきた現場に遭遇。これを清の交渉でアンダーソンは5000円で入手、骨格と毛皮にして英国に持ち帰った。これが日本最後のオオカミとなり、清は博物学上で貴重な場面に立ち会った人となる(写真は諏訪市博物館提供)

ヤツガシラ(右の2羽)、コウライウグイス(左上の2羽)、ベニサシショウクイ(左下)など外国産の小鳥

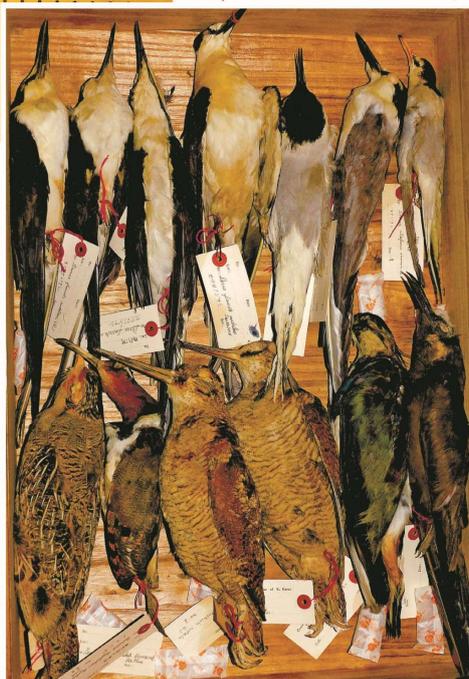


国内外に生息するカラミシ科の鳥たち。1世紀を過ぎても羽毛の色彩は美しく保たれている



国内外に生息する小型カラスの標本。カラスのイメージを一身するようなカラフルな鳥たち

湿地や水面上空を主に活動するシギやチドリ、アシサシなど水辺の鳥



原村のハケ岳美術館・歴史民俗資料館は8日(土)から、「世紀を超えた鳥類標本の全容」と題した展示会を開く。日本野鳥の会諏訪支部名誉支部長の林正敏さん(80)＝岡谷市川岸東一が、45年間自宅で保管してきた約3000点の鳥類標本と関連資料を国立科学博物館(茨城県つくば市)に一括寄贈する前に、地元の人に貴重な標本を見てもらう。

標本3000点の内訳は、鳥類242種2391点、獣類12種59点、鳥卵550点。標本は一般展示用の仮はく製ではなく、学術研究用の仮はく製として丁寧な処理が施され、100年以上経過しても羽毛の色彩は色あせていない。林さんはこれらの標本を二つのルート、4人の関係者から寄贈を受け、自宅で保管してきた。「ほとんどの鳥が捕獲できた明治、大正期の標本。大半の種が現在は捕獲できない保護鳥で、二度と入手ができない貴重なもの」という。

今展では全ての標本に加えて、高山標本と一緒に寄贈を受けて保管していた生物画家、小林重三(しげかず、1887~1975年)の「信濃稀産鳥類」の軸画、鳥卵標本の製作道具なども展示する。林さんは「貴重な標本は過去から未来への宝物。国の財産として有効に活用してもらえれば」と話す。展示は7月7日(日)まで。

今展では全ての標本に加えて、高山標本と一緒に寄贈を受けて保管していた生物画家、小林重三(しげかず、1887~1975年)の「信濃稀産鳥類」の軸画、鳥卵標本の製作道具なども展示する。林さんは「貴重な標本は過去から未来への宝物。国の財産として有効に活用してもらえれば」と話す。展示は7月7日(日)まで。

ハケ岳美術館での展示紹介

貴重なはく製・鳥卵・図画など公開

6月8日
▽7月7日

標本一覧表 (高山)

種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数
アオゲラ	3	サメビタキ	2	ヤマセミ	1	卵の標本	
アオジ	3	サンショウクイ	3	ヤマドリ	3	アオジ	24
アオバズク	7	シジュウカラ	47	ヨシゴイ	5	アカハラ	15
アオバト	1	シマセンニュウ	8	ヨシカ	8	アカモズ	11
アカエリヒレアシシギ2		シメ	11	ライチヨウ	9	ウグイス	24
アカゲラ	1	ジュウイチ	1	ルリビタ	18	ウズラ	6
アカハラ	7	ジョウビタキ	40	計	1,722	エナガ	11
アカモズ	6	シラオネツタイチヨウ1				オオヨシキリ	10
アトリ	9	シロハラ	5			オオルリ	15
アビ	1	スズメ	13	哺乳類		カッコウ	4
アリスイ	5	セグロセキレイ	2	アズマモグラ	14	カラス	1
イカル	31	セッカ	1	イタチ	1	カワガラス	4
イカルチドリ	4	センダイムシクイ	13	カワネズミ	2	キジ	4
イスカ	44	タヒバリ	15	ジネズミ	2	キジ、ヤマドリ	2
イソシギ	6	ダルマエナガ	1	ドブネズミ	2	キジバト	1
イソヒヨドリ	6	チゴモズ	4	ハタネズミ	19	クイナ	26
イワツバメ	9	チョウゲンボウ	2	ハツカネズミ	6	クサシギ	1
イワヒバリ	1	ツグミ	9	ヒミズ	4	クロセキ	1
ウグイス	18	ツツドリ	1	モモンガ	2	クロツグミ	3
ウズラ	13	ツバメ	10	ヤチネズミ	1	コチドリ	4
ウソ	24	ツミ	24	ヤマネ	3	コバン	6
エゾビタキ	1	ツルシギ?	1	計	59	コマドリ	1
エナガ	32	トウネン	2			コムクドリ	30
オオコノハズク	10	トビ	3			コルリ	2
オオジシギ	3	トラツグミ	10			サメビタキ	8
オオジュリン	6	ニュウナイスズメ	36			シギ	2
オオマシコ	33	ノジコ	9			シジュウカラ	11
オオヨシキリ	42	ノスリ	1			スズメ	23
オオヨシゴイ	1	ハイタカ	15			セキレイ	22
オオルリ	114	ハギマシコ	3			センダイムシクイ	9
オシドリ	2	ハクセキレイ	5			チゴモズ	40
カイツブリ	1	ハンボソガラス	1			チャボ	3
カケス	6	ハマシギ	1			ノジコ	2
カシラダカ	4	ハリオアマツバメ	1			バン	6
カッコウ	1	バン	2			ヒクイナ	6
カナリア	3	ヒガラ	193			ヒバリ	48
カヤクグリ	24	ヒクイナ	1			ビンズイ	1
カワアイサ	1	ヒバリ	3			ホオジロ	24
カワガラス	3	ヒメクイナ	2			マガモ	2
カワセミ	5	ヒヨドリ	7			マミジロ	1
カワラヒワ	27	ヒレンジャク	14			水天宮	1
ククイタダキ	6	ビンズイ	17			ミソサザイ	8
キジ	4	ベニヒワ	2			ミミズク	1
キジバト	1	ベニマシコ	19			ムシクイ	1
キセキレイ	9	ホオジロ	10			モズ	72
キバシリ	32	ホシガラス	9			ヤマショウビン	10
キビタキ	11	ホトトギス	8			ヨシキリ	32
キレンジャク	35	マヒワ	11			ヨタカ	8
クサシギ	1	マミジロ	7			ラベルなし	1
クロツ	3	マミチャジナイ	1			ルリコマ	2
クロツグミ	17	ミサゴ	1			計	550
ケアシノスリ	1	ミソサザイ	4				
コアシサシ	3	ミツユピカモメ	1				
ゴイサギ	1	ミヤマホオジロ	3				
コガモ	1	ムギマキ	18				
コガラ	51	ムクドリ	10				
コゲラ	11	ムナグロ	1				
コサメビタキ	23	メグロ	4				
ゴジュウカラ	3	メジロ	25				
コジュリン	1	メボソムシクイ	105				
コチドリ	2	モズ	33				
コマドリ	53	ヤブサメ	6				
コムクドリ	20	ヤマガラ	24				
コルリ	33	ヤマシギ	1				

・種名(和名)は、日本鳥類目録改訂第7版に準拠した。
 ・日本鳥類目録改訂第7版に記載されていない種の和名は、標本ラベルの通りに入力した。
 ・「種名」は、標本ラベルに記載の通りに入力した。
 ・標本ラベルの種名と標本の種名が異なっていると思われるものは、備考に記載した。
 ・標本ラベルに亜種名が記載されているものは、備考に種名を記載した。
 ・羽色から亜種を識別できるものは、備考に亜種名を記載した。
 ・標本ラベルのない標本は「ラベルなし」と記載し、標本からわかる種名やグループ名を記載した。

標本一覧表 (金井)

種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数
アオアシシギ	1	カイツブリ	8	シジュウカラ	1	ヒバリ	4
アオゲラ	3	カオグロガビチョウ	1	シマアオジ	1	ヒメクドリ	6
アオサギ	2	カケス	6	シメ	6	ヒメドリ	13
アオジ	3	カササギ	2	ジュウイチ	2	ヒレドヤク	4
アオシギ	9	カシラダカ	1	ジュウシマツ	2	ヒレドヤク	2
アオシヨウビン	1	カッコウ	1	ジュウドウツバメ	2	ビロズイ	1
アオバズク	2	カナリア	3	ジュウビタキ	3	フクロウ	2
アオバト	1	カヤクグリ	4	シロアジサシ	1	ベニサズメ	1
アカエリカイツブリ	1	カラスバト	3	シロチドリ	8	ベニヒメ	3
アカエリヒレアシシギ	4	カルガモ	1	シロハラ	2	ベニマシコ	2
アカオネツタイチ	1	カワガラス	1	シロハラクイナ	1	ヘラオシギ	1
アカガシラサギ	1	カワセミ	2	シンジュバト	1	ホオアジ	1
アカゲラ	10	カワラヒワ	6	スズガモ	1	ホオオジ	4
アカシヨウビン	2	キアシシギ	2	スズメ	2	ホオシロ	6
アカツクシガモ	2	キクイタダキ	2	セキセイインコ	1	ホオシロ	1
アカハラ	4	キジ	5	セグロアジサシ	4	ホオシロ	3
アカヒゲ	1	キジとヤマドリの交雑	3	セグロカモメ	1	ホオシロ	2
アカヤマドリ	1	キジバト	5	セグロセキレイ	4	ホオシロ	1
アジサシ	1	キセキレイ	4	セツカ	1	ママキ	2
アトリ	1	キバシリ	4	セシムシクイ	1	ママキ	1
アマサギ	1	キビタキ	3	タカサゴモズ	1	ママキ	3
アマツバメ	1	キレンジャク	4	タゲリ	2	ママキ	1
アリスイ	3	キンクロハジロ	8	タシギ	2	ママキ	3
イカル	2	キンバラ	3	タヒバリ	3	ママキ	2
イカルチドリ	1	クイナ	5	タマシギ	1	ママキ	1
イスカ	3	クサシギ	2	チゴモズ	4	ママキ	2
イソシギ	4	クビワガラス	1	チメドリ科	2	ママキ	1
イソヒヨドリ	8	クマゲラ	1	チュウサギ	1	ママキ	4
イヌワシ	1	クロアジサシ	1	チュウシヤクシギ	2	ママキ	3
イワシヤコメ	1	クロウタドリ	1	チュウゲンボウ	3	ママキ	5
イワツバメ	2	クロジ	2	鳥類卵	1	ママキ	4
イワヒバリ	2	クロガビチョウ	1	ツグミ	5	ママキ	2
インドミノキジ	6	クロツグミ	2	ツツドリ	1	ママキ	11
ウグイス	4	クロハゲワシ	1	ツバメ	2	ママキ	4
ウズラ	2	クロライチョウ	2	ツミ	5	ママキ	2
ウズラシギ	1	コアジサシ	1	ツルシギ	3	ママキ	7
ウソ	5	ゴイサギ	1	トウネン	2	ママキ	1
ウミアイサ	1	コウライウグイス	2	ドバト	3	ママキ	4
ウミネコ	2	コオバシギ	1	トビ	2	ママキ	5
エゾライチョウ	2	コオリガモ	1	トモエガモ	6	ママキ	1
エナガ	3	コガモ	3	トラツグミ	3	ママキ	4
オウチュウ	2	コガラ	3	ナベコウ	1	ママキ	4
オオカラモズ	2	コキンメフクロウ	1	ナンキンオシ	1	ママキ	1
オオコノハズク	2	コクガン	1	ニューナイズメ	1	ママキ	6
オオジュリン	1	コクマンキジ	1	ノガン	5	ママキ	1
オオセグロカモメ	2	コゲラ	3	ノゴマ	2	ママキ	2
オオソリハシシギ	2	コサメビタキ	2	ノジコ	4	ママキ	4
オオタカ	1	ゴシキヒワ	1	ノスリ	4	ママキ	7
オオチドリ	5	ゴジュウカラ	2	ノビタキ	5	ママキ	1
オオハクチョウ	1	ゴジュリン	1	ノビタキ	6	ママキ	1
オオハム	1	コチドリ	5	ハイイロオウチュウ	1	ママキ	6
オオバン	2	コハクチョウ	1	ハイイロチュウヒ	1	ママキ	1
オオマシコ	4	コマドリ	2	ハイタカ	8	ママキ	8
オオモズ	1	コミミズク	3	ハギマシコ	3	ママキ	3
オオヨシキリ	1	コムクドリ	2	ハクセキレイ	2	ママキ	2
オオヨシゴイ	1	コムクドリ幼鳥?	3	ハシビロガイ	4	ママキ	4
オオルリ	8	コヨシキリ	5	ハシロカイツブリ	1	ママキ	2
オオワシ	1	コルリ	1	ハツカチヨウ?	2	ママキ	4
オシドリ	3	サケイ	12	ハマシギ	12	ママキ	7
オナガ	4	ササゴイ	1	ハマシギ	1	ママキ	1
オナガガモ	3	サシバ	1	バンケン	1	ママキ	4
オナガキジ	1	サンカノゴイ	2	バン	4	ママキ	4
オナガミズナギドリ	1	サンコウチヨウ	8	ヒビガラ	4	ママキ	4
オバシギ	1	サンショウクイ	1	ヒビイナ	1	ママキ	1
カアレン	2	ジシギ類の1種	1	ヒビドリ	3	ママキ	7
					6	Megapodius 計	669

■ 記念講演

令和7年6月22日（土）午後1時30分～3時

講演(1)；「剥製とその遺伝子解析が教えてくれること」

講師：笠原 里恵氏（信州大学理学部湖沼耕地教育研究センター諏訪臨湖実験所 助教
・鳥類学）

令和7年7月4日（木）午後1時30分～3時

講演(2)；「私にとっての標本と先人の偉業」

講師；林 正敏

先人の努力によって鳥の標本が作られて100年余、そして筆者林に譲られて45年。学術標本として寄贈先の国立科学博物館に収まれば一般公開の機会は先ず望めません。今回は唯一の機会ととらえ、去る6月8日から1ヵ月間にわたって全資料3,000点を一挙公開展示したところ、大変多くの皆さんに貴重な資料群をご覧いただくことができました。ここに厚くお礼申し上げます。

展示を補完した講演会は、会期も終わりに近い7月4日、展示会場の八ヶ岳美術館内で行われ、県内外から150人もご参加いただきました。お話の内容は、私が通った小学校の入学時に始まります。廊下の戸棚越しに見た数多くの鳥の剥製は、幼い頃から動物好きだった私にとってまさに衝撃的で、鳥を間近で見られた嬉しさに廊下に座り眺めていました。

時は過ぎ、地元紙の記者として各校で目についた剥製が気になり取材を開始。すると管理、活用がされていないばかりか、次つぎと剥製が失われている現実に直面し危機感を覚えました。本格的な取材に取り組み2年掛かりでまとめた結果は、諏訪地方を含む8市町村の55校で750点余の鳥の剥製が現存、どの学校も利用されていない共通点が明らかになりました。この現実を私はタブロイド判2全面を2度にわたって特集記事で報じながら、個人の立場で一部の自治体には教育長を通して各校で標本管理の徹底と学習に活かすよう要望書を提出しました。

標本は過去から未来へ、地球が残したかけがえのない遺産です。山国信濃で四人の先人によって捕獲され、集められた沢山の命はその形を残したまま、いま私の元にあります。駆け込み寺のように集まるべくして集まった標本たちが、ようやく安住の施設に移ります。この先、100年、200年、どのような形で生かされるのか、楽しみです。

○剥製標本から当時の環境に思いを馳せる

信州大学理学部附属諏訪臨湖実験所 笠原 里恵

剥製標本は、我々が戻ることが出来ない過去の情報を現在まで保持する、重要な「歴史の証人」であり、標本につけられたラベルに記載された採取年月日と採取地



講演は子供の頃の話から始まりました

は、その種が確かにそこにいた強い証拠となる。林正敏先生が長年保管されていた剥製など 3,000 点が公開された八ヶ岳美術館の展示会では、貴重な標本を拝見すると同時に、諏訪地域で採取された種の数々から、明治～大正時代の諏訪地域の環境を想像（夢想？）する素晴らしい機会をいただいた。標本には全国的にも出会う機会が少ないヒメクイナや絶滅危惧種のタマシギ、ヨシゴイなどが、当時の諏訪地域で採取されたものとして複数含まれていた。これらの鳥はヨシ原や水田などを好む。またムナグロやキアシシギなど、開けた湿地帯を渡り時期に利用する種の諏訪市産標本も複数あり、諏訪湖の存在を思えば当然ながら、当時の諏訪地域はどれだけ広大な湿潤環境だったのだろうかと思う。一方で、やや暗い林を好み、雄の長い尾と美しい鳴き声の特徴的なサンコウチョウと、明るい山地林を好むとされるチゴモズの標本が同時にあるなど、周辺の山々の環境は、新採取や炭焼きなどの人の手入れでかなり多様だったと想像できる。当時の地域写真や記録も辿りたくなる、想像力を大変刺激された今回の展示会開催に心から感謝申し上げたい。今後は、国立科学博物館に収蔵されることで、より多くの人々の探求心を刺激し、応えていこう。

○ 会場に来られた方の感想ノートより

- ・先人が鳥の収集にかける情熱が時代背景とともに伝わってきました。これら大変貴重な標本を譲り受け、今日まで保存されてきた林さんに敬意を表したい気持ちでいっぱいです。
- ・展示の日に至るまでのご苦勞をありがとうございました。それぞれが目を向けなくてはならないのは、関わる人、関わってきた人、関わってゆく人の思いなのだとおもいます。データではなく実物を眼前にし、囲まれる空間で自分もまた生物なのだと思い出す次第です。
- ・シマアオジが見たくて上越からきました。素晴らしい展示ですね、ありがとうございました。
- ・4歳の娘がさわられる標本をととても気に入り、2回目になりますが見に来ました。貴重な展示ありがとうございました。
- ・NHKの列島ニュースで鳥類標本の展示を知りました。鳥大好き人間としては絶対に行きたい！ 大雨のなか来館しました！！



多くの方が書き残してくれました

○ 国立科学博物館

国立科学博物館は、[地球や生命の歴史と現在、科学技術の歴史]を研究するため、標本・資料を収集している。収集の対象は動物、植物、菌類標本、生きた植物、鉱物、化石、人骨、科学技術史資料など多岐にわたり、60名を超える各分野の研究者がこれらの標本をもとに日夜研究に励んでいる。



地球館展示室

国立科学博物館；東京都台東区上野公園 7-20 上野駅 JR 公園出口から徒歩約 5 分

林 正敏 1944～

1944年長野県岡谷市に生まれる

信州市民新聞グループ記者を30年余。続いて岡谷市塩嶺小鳥の森のコーディネーターを15年務める。1967年に野生動物の観察団体シートン会を立ち上げ会長に。1984年日本野鳥の会諏訪支部長となり、同時に塩嶺小鳥バスの案内も担当し共に40年、諏訪湖の全面禁猟を提唱し支部の運動により禁猟が実現した。長年にわたり長野県野生鳥獣救護ボランティアとして活動、令和6年3月まで長野県鳥獣保護管理員を務めた。



表紙の軸画に描かれた鳥

小林重三により描かれた軸画の9種類の鳥は、ヤマヒバリ、シラガホオジロ、シマノジコ、エゾムシクイ、ナキイスカ、マミジロキビタキ、ツメナガホオジロ、マキノセンニュウ、ハマヒバリです

展示に向け写真を提供頂いた諏訪市博物館、資料整理など協力いただいた日本野鳥の会諏訪支部の竹中敏、永富直子、西教生、林俊男の各氏にお礼申し上げます。

世紀を超えた鳥類の標本
(非売品)

発行 令和6年10月

諏訪湖クラブ事務局

〒392-0017 諏訪市城南二丁目 2362

TEL/FAX 0266-58-0490

E-mail e-suwa-info@lake.gr.jp

<https://suwako-club.com/about.html>

著者 林 正敏

編集 八幡 義雄

発行に当たっては、「長野県地域発 元気づくり
支援金」の補助を受けています